

文

化

労働者の街 横浜・寿



西川紀光さん④と筆者。一緒に酒を飲んだ。(1994年)

労働者の街に生きた哲学者

◇横浜・寿町で出会ったキミツさん 日雇い仕事と思索の日々を取材◇ トム・ギル



町に西川紀光という男がいた。酒と港を好み、仕事がない日は「アーランド宿泊所」で哲学書をはじめとした様々な本を読み漁る。その思考は縱横無尽に広がった。港湾で働きながら思索を深めた米国社会学者エリック・ホッファーのようすがいた。

1993年10月20日、寿労働センター前で会った。ギミツ。名乗つたが、本当に当時は「アーランド・ヒース・ハロルド・ウィルソン……」。

私が英国人と分かることで、西川の名を挙げ英語で話しかけてきた。失礼ながら、ここにインテリがいるとは思っていないかったので驚いた。

私は大学を卒業した83年に初めて来日した。数年後、通信社で英文翻訳の仕事をしていたところ東京・山谷で暴力団と過激派の抗争が激化した。イメージしていた「和の国」とは違う側面に驚き、取材に入った。日雇い労働者への興味が募り、ロン

ドン大学で研究を始めた。紀光との出会いは、博士論文のフィールドワークのときだった。

紀光は研究対象であるとともに友達となり、様々な話をした。40年生

まれ、熊本出身で元自衛隊員。日雇い仕事では建設現場よりも港での荷役を好んだ。ドヤには難しく本が山積みになっており、私が知らないことを数多く教えてくれた。

例えハイゼンベルクの不確定性原理。量子力学で電子などの粒子の位置と運動量を同時に正確に測定することはできないとするものだ。紀光は自ら不確定な電子になぞらえ、「自分の居場所を将来の道分かりません」と語った。紀光はじめ日雇い労働者たちを見自由だが、社会や

高齢になり働けなくなると福祉の世話になった。

寿町にはそれを嫌う男たちも多い。だが紀光にとっては、日雇いでお金を稼ぐことも、生活保護を受けけることも、寿町のアフターケースなのだ。ちなみに多い。たがいにどうぞおしゃべりがいた。筆頭が18世紀英国の文学者サミュエル・ジョンソン。英語辞典を編んだ人だ。紀光はいつも、ジョンソンのよう

に「シェネラライズした世界觀が必要」と説いていた。もう一人が宗教学者の中澤新一氏。チベットで実際に修行したことから、世界觀を重ねた紀光らしい2人だ。

2013年、紀光への聞き取りの考察を「毎日あはうだんす」(ギヨーム出版)にまとめて刊行した。人類学の「二

経済の状況に流される存

在であるということだ。

紀光の肝臓がんと認知症が悪化。15年6月1日に75歳で亡くなっ

た。最期の日々や、紀光のお姉さんから聞き取った記録などを追加し、20年秋に「完全版」として年秋に「完全版」として同社から再出版した。

紀光は我が家に来たこ

とがある。楽しく過ごし

た後、帰国際に「かわい

い子供たちと会えて幸せ

です」と涙した。「人生、

面白おかしい」というの

が口癖で冗談を言って

いた。最後の日々や、紀光が口癖で冗談を言っていた紀光は、独中に生きた寿町の哲学者のことを、多くの人に知ってもらいたいと思

う。『明治学院大学教授

』

た後、帰国際に「かわい

い子供たちと会えて幸せ

です」と涙した。「人生、

面白おかしい」というの

が口癖で冗談を言って

いた。最後の日々や、紀光が口癖で冗談を言っていた紀光は、独中に生きた寿町の哲学者のことを、多くの人に知ってもらいたいと思

う。『明治学院大学教授

』

た後、帰国際に「かわい

い子供たちと会えて幸せ

です」と涙した。「人生、

面白おかしい」というの

が口癖で冗談を言っていた紀光は、独中に生きた寿町の哲学者のことを、多くの人に知ってもらいたいと思

う。『明治学院大学教授

』